

## 私の得意科目が物理だった理由

日本文学科3年

丸井 ひよこ

きっかけは、眼鏡だった。

「美優って、今井先生のこと好きなの？」

親友の果歩にそう聞かれたのは、高校二年の秋のことだった。その直前まで「もう夏服も肌寒くなってきたね」と話していたから、よく覚えている。

「な、何でそうなるの!？」

唐突な質問に私は動揺を隠せず、見事に声が裏返った。ついでに持っていた弁当を取り落としそうになる。落ち着け、私。

「だって、顔が嬉しそう」

案の定、私の態度から確信を得たとでも言うように、果歩がニヤニヤしながらこちらを見てくる。……昼休みで周囲に人が少なかったからいいようなものの、何てことを聞くんだこの親友は!

私は気を取り直して、弁当のからあげを箸でつまみ上げた。

「たとえ小テストでも、満点取れば誰だって顔の一つや二つ、緩んだっておかしくないでしょうが」

心の中で(平然と、何でもなさそうに、落ち着いて…)と繰り返しながら、そう反論を試みる。が、いきなり「そうそう!」と、牛乳パックのストローを突きつけられた。

「その美優が満点取った物理だけど」

果歩は私にストローを突きつけながら、ゆっくりと言う。こういう時の果歩は正直、恐ろしい。今まで何度、こうやって誘導尋問に引っ掛けられたことか。

「な、何よ」

果歩から漂ってくるプレッシャーに気圧されながらも、私は何とか続きを促した。

「今回の小テストといい、文系が得意教科のアンタにしたら、随分、頑張ってるじゃない」

「……………」

そう。何を隠そう、私の得意教科は英語と国語、それから世界史である。誰に言われるまでもなく、自分で根っからの文系だと自覚もしている。けれど、物理は誰がどう考えても理系。では何故、文系の私が物理の小(と言え

ど立派な) テストで満点を取ることができるのか。それはもちろん、勉強しているからである。……物理だけ。

私は冷や汗を掻きながら、箸を動かして黙々と弁当を食べ続けた。

「それに、数学の授業は爆睡なのに、同じ理系でも物理だけはバッチリ起きてるし」

「……………ソウデスネ」

私の座席は、一番窓際の列の後ろから二番目。ちなみに彼女は、その後ろ。必然的に、私の居眠りは彼女に完全にバレている。その彼女がそう言っているんだから、これほど確かなことはないだろう。私は最後となった卵焼きに箸を突き刺す。

最後に果歩は、今の今まで突きつけていたストローをふたたび自分の口元に持っていくと、「それにさあ」と、呆れるように私を見た。

「……私に隠し事できるほど、アンタ器用じゃないわよ」

弁当の中身は、最早ない。

「……………知ってるよ。それくらい」

親友が鋭いのか、それとも私が分かりやすいただけなのか。

それはこの際、横に措いておくことにしよう。

私は空になった弁当箱を、膝の上にすたとんと載せた。

そう。

たとえ言うにしても、文字にするにしても、当人としてはとても恥ずかしいっらないのだが、私は物理教師の今井清隆に、所謂、恋をしていた。

+ + +

その日、私は朝から鞆をひっくり返す羽目に陥った。

「ない！」

自分の机の上に、今日のテスト教科のノートやらプリントやらを盛大にぶちまけながら、私は焦っていた。鞆の上下を反対にして振ってみても、落ちてくるのはカスと空気ばかり。

「何がないの？」

一緒に登校してきた果歩が、後ろの席からひょいっと覗いてくる。

「眼鏡」

簡潔な私の一言に、果歩は「あ～ああ」と溜息をつく。溜息つきたいのはこっちの方だ。

私は視力が悪いくせに、普段から眼鏡をかけずに生活している。

その理由は、「似合わない」から。

早くコンタクトレンズにしたいとは思っているけど、なかなか時間とお金の都合がつかない。しかし座席は後ろの方であるから、黒板の文字がたいへん見えにくい。それに眼鏡をかけた方が、集中できる気がするのだ（あくまで「気だけ」なのだけれど）。

そんなわけで、眼鏡は授業中、もしくは勉強中の必須アイテムとして欠かせない。

「待った。そこにケース、あるじゃん」

果歩が指差す先には、確かに私が眼鏡を作った際に貰った、店名入りの眼鏡ケースがある。

しかし、

「肝心の中身がないの！」

ほら、とケースを手にとって、中を開いて見せる。そこには、レンズを拭くための布があるだけで、本体がない。傍から見ると、すごく間抜けである。

「……………家に置いて来たに一票」

至極まっとうな解答だが、私は首を横に振った。

「ううん。昨夜は家で眼鏡使っていないもん」

それに果歩は腕を組み、首を傾げる。

「昨日の授業では、ちゃんと眼鏡はかけてたよね」

「うん」

果歩のことばにつられて、私も昨日のことを順に思い出していく。朝、授業、昼休み、放課後……。そしてその内に、ある可能性に行き当たった。

「もしかして」

「もしかして？」

「視聴覚室に、忘れてきたのかも」

私と果歩は昨日までの一週間、放課後に視聴覚室の片隅を借りてテスト勉強をしていた。文系・理系と完全に分かれる私たちだが、二人で勉強すれば教え合うことができる、という利点がある。そこで私はいつも通りに眼鏡をかけ、その後に休憩するとき以外……。ケースにしまった覚えがなかった。

「……ありえる」

信用ある親友のことばを受け止めると、私は時間を確認して席を立った。職員会議が始まるには、まだ時間がある。

「ちょっと、職員室に行って来ます」

「テスト勉強はしなくていいの？」

「そもそも眼鏡がないと集中できないもん！」

私は教室を飛び出すと、一つ下の階にある職員室へと急いだ。

「忘れてた……」

職員室に着いたものの、私は一枚の紙の所為でそのドアの前で立ち尽くす羽目になった。

『テスト期間中につき、生徒の立ち入りを禁ず』

(えーっと、こういう時ってどうすればいいんだろ。別に立ち入らなきゃい

いわけだから、ドアを開けて先生に「視聴覚室に忘れ物したんですけど」とか言うくらいは許してもらえるよ、ね？)

普段から職員室に縁遠い私は、職員室に行くというだけでも億劫な気分になる。それに加えて、この「生徒のお前は入れません」と主張する紙。今すぐ教室に帰りたいが、それでは眼鏡の行方がわからないままになってしまう。(……しょうがない)

意を決して、ドアをノックしようとしたその途端、  
「何してんだ？」

「——っ！！」

背後から肩を叩かれて、私は文字通り飛び上がった。

肩越しに振り返ってみれば、そこには物理の教科担当である今井清隆がニヤニヤしながら立っていた。確信犯か、このやろう！

「先生、足音立てずに背後から来るの、いい加減やめて下さいっ」

「相変わらず反応が面白いなあ、吉田は」

三十路を過ぎているというのに、この物理教師、たまにこういった子どもっぽいことをする。こうやって脅かされるのは、一体何度目であろうか。

「で、こんなところで何してんだ？」

職員室をこんなところ呼ばわりの上、私に対する謝罪もないんですかぁ！

とは思ったものの、目の前の子どもっぽい大人も教師には変わらない。これはちょうどいいとばかりに、私はかくかくしかじかと、ここに到るまでの経緯を話した。

そして、それを聞いた今井先生の一言目が、

「ふーん。そりやお前、間抜けだな」

いくら何でも感想が率直すぎると思います、先生。

「確かに間抜けですけど……。先生ってば口悪いなあ」

「人間、正直が一番だぞ」

「正直だけじゃ、世の中は生きていけませんって」

「……吉田、お前本当に高校生か？」

「これでも、ぴちぴちの女子高生ですが」

そりや驚きだ、と笑いながら、今井先生は私の右隣に立ち、「おはようございます」と職員室のドアを開けた。無造作で何でもない行為だった。でもその一瞬、私は呆然とした。先ほどまで一枚の紙きれが発していた拒絶感が、たったその一瞬で打破されてしまったのだ。あとに残るのは、テスト前の慌しい空気と、朝の清々しさだけ。

先生はそのままドアをくぐって数歩行くと、呆然とする私に「来い来い」と手招いた。

「え、や、でも……」

それでもまだ張り紙が、と躊躇する私に、今井先生は笑って言う。

「忘れ物が気になるんだろう？ 大丈夫だから、ちょっと入っておいで」

さっきはあんなに子どもっぽいことをした先生が、今は歳相応の顔をして言う。何だかよく分からない人。でも、嫌いじゃない。

私はそのことばに背を押されるように、えいっと職員室へ足を踏み出した。

「昨日の忘れ物？」

そう言って顔を上げる、丸い体格に四角い銀縁眼鏡をかけたおばさん、もと国語担当の金岡久美子先生は、忘れ物管理係なのだという。

「そうらしいです。——眼鏡だったよな」

取り次いでくれた今井先生が、こちらを振り向いて私に確認する。同じ眼鏡でも、こちらは細長いタイプで、よく見ればフレームがない。ちょっとだけ、かっこいいと思ったことは内緒だ。

私は頷きながら、「多分、視聴覚室だと思うんですけど」と補足する。

「そうねえ。……その眼鏡のブランドは？」

まさか、そう訊かれるとは思わなかった。

「ブ、ブランド？ ……ええっと、えー、ブランド……ええ～？」

いくら唸っても思い出せない。というか、そもそも覚えてないよ、そんなの！

頭を抱える私を見て、今井先生が金岡先生に楽しそうに言う。

「金岡先生、あんまりいじめちゃダメですよ。吉田は意外と真面目ですから」

「そうみたいねえ」

「……先生たちって、本当に教師ですか？」

にらむ私を「まあまあ」と軽くいなすと、金岡先生は件の眼鏡の色や形などを私に確認する。そしてどこからともなく鍵を取り出すと、「はい」と今井先生に手渡した。

「それっぽい眼鏡なら、今朝私の机の上に届けられていたわ。今は忘れ物管理の棚の中にあるから、ちょっと確認してみてちょうだい」

「ありがとうございます」

「ほれ、こっちだ」

金岡先生へのお礼もそこそこに、今井先生の案内で一つのスチール棚に辿り着く。早速、棚のガラス戸から眼鏡を探すことにした。

「んー……あ、これ！ 私のっぽい！」

「これか？」

手に取って確認すると、やはり私の眼鏡だった。レンズの厚さも細かい傷の付き具合も、ぴったり同じだ。

「間違いないです」

「見つかってよかったな」

今井先生が、言いながら棚に鍵を掛ける。私は素直にお礼を言うことにした。

「ありがとうございました」

「それじゃ、テスト頑張ってるな」

出口はあっち、と示す指に、私は少しまごつく。

「あーっと、その……」

「？ 何だ？ テストの問題なら教えないぞ」

「そうじゃなくて、その」

なかなか言い出さない私を見て、先生は「ふむ」と少し考えると、唐突に私の肩をくるりと回し、そのまま背をぐいぐい押し始めた。

「ちょ、先生？」

「はい、そのままー」

こちらの意思もお構いなしに、先生は私を押し出すように職員室から廊下に出て、終いにはドアをきちんと閉める。

「で、何だって？」

向かい合うなり、先生が私に訊く。

確かに職員室では話しにくいことだったのだが、私はそのまま追い出されるのかと思ってしまった。

「……テスト期間中なのに、私が入っちゃって大丈夫だったんですか？」

心持ち声を小さめにして、改めて私は先生に訊ねた。

すると、

「本当に、吉田は真面目だよなあ」

と、くすくす笑う。こっちは真剣なのに。

私よりも、先生のことだ。利用した身で今さらとは思うが、今回みたいな特別扱いは、他の先生によく思われたいかもしれない。

「そうじゃなくてですね……！」

ふと大きくなりかけた私の声は、目の前に出された掌にストップをかけられた。

「分かってる。今のは冗談。そんなに心配しなくても、大丈夫だよ」

だからどうしてこの人は、普段はああなのに、たまにこんな大人みたいな顔をするんだろう。いや、立派な成人男性（それも三十路過ぎ）には違いないのだが、ギャップがあって、私なんかはどきっとしてしまう。

何だか悔しくて、私は少し意地悪な気分になった。

「……もしも私が、テスト問題を見る気で嘘をついてたりしたら、どうするんですか」

先生は一瞬、キョトンとした顔を見せた。こんな質問をされるとは思わなかったらしい。

が、その次の瞬間には

「大丈夫だって」

と断言した。

「は？」

そんな風に言い切る自信が、どこから降って湧いて出てくるのか。

首を傾げる私に、当たり前のような顔をして先生は続ける。

「だってお前、そんなことするやつじゃないだろう」

不覚にも、一瞬で顔が熱くなった。

きっと他の人には、私の顔は火照ったように見えるんだろう。何てことだ。恥ずかしい。私はその顔が先生に見られないように、視線を自分のつま先まで下げた。

「……楽観主義ですよ、それ」

こんなときほど、自分のひねくれた性格が恨めしく思ったことはなかった。もっと素直になればいいのに。頭の上で、ふっと息の漏れる気配がした。また先生が笑ってる。

「お前はもうちょっと、楽観的に物事を見てもいいと思うぞ」

そのとき、「余計なお世話です」って言おうとしたのに、たったその一言が、のどに詰まって声にできなかった。

「それじゃあ少しばかり、息苦しいだろう？」

俯く私の頭を、優しく、ぽんぽんと弾むように撫でる、その大きな掌。

時間が止まればいいのに、と思ったのは、これが初めてだった。

そして、およそ一週間後の放課後のこと。

私は一階廊下の掲示板の前で、重いダンボール箱を「もうダメ！」とばかりに下に投げ出していた。部活の関係で職員室に顔を出したら、写真部の顧問から「ちょうどいいや、ちょっとこれ部室まで運んでくれ」と頼まれたのだ。

私と一緒に来たはずの果歩は、「こっちの方は軽いから、さっさと持って行って、またすぐ手伝いに戻って来るよ」と、先にダンボールを抱えて部室に行ってしまった。

暇を持て余した私は、掲示板の大きいポスターを眺めることにした。何の目的でなのかは知らないが、どうやら三百六十五日分の誕生日が載っているらしい。

(果歩が戻ってくるまで、まだ時間はあるよなあ)

私は暇つぶしに、自分の誕生日を探してみることにした。

(えーっと、十月だから……あ、あった。リンドウかあ。花言葉は……)

「お前、十月が誕生日なのか？」

「のわあっ！」

私は突然間近で聞こえた声に驚き、廊下に奇声を響かせてしまった。

「……面白いよなあ、ほんと」

しみじみと私の背後で呟くのは、もはや間違えようもない。

「——今井先生！」

「当たり前」

「そうでなく、こういうことはやめて下さいって何回言ったら分かってくれるんですか！」

「だって面白いんだもん」

三十路男が、「もん」とか言うな。

「知りませんよ。そんなこと！」

私は前に向き直って、掲示板を眺めるフリをする。

何だか職員室の一件以来、先生と顔を合わせにくくなってしまった。

別にあの後、何かがあったわけではない。むしろ何もなかった。先生が「それじゃ、職員会議の時間だから」と自然に職員室に戻って行き、私も教室に戻って無事にテストを受けた。今振り返っても、なんてことのない日だった。

それなのに、だ。

「へえ、リンドウか」

後ろから、低めの声が私の耳を震わせる。

無意識が手を動かしていたらしい。私の指は、自分の誕生日の欄を囲うように往復していた。

「……先生は？」

ふと、思った。思ったときには、もうことばになっていた。

「ん？」

「先生の誕生花は、何ですか？」

前まで気にしていなかったことが、何故こんなにも気になるんだろう。

「さて、何だろう」

先生は私の隣に立ちながら、ポスターのあちこちに目を配る。今から探すらしい。

そのとき突然、気がついた。

今のこの状態は、こないだ職員室のドアの前に立ったときと同じ位置だ。私が左で、先生が右側。それだけのことなのに、私の胸はときんと弾む。

「そういやお前さ」

先生が、ポスターからちらっと目を離してこちらをにらんだ。

「こないだの物理のテスト。ありゃ何だ？」

「ああああああ、言わないで下さいっ」

私は耳をふさいでその場にうずくまった。

何とか赤点は免れたものの、得点としてはかなりの低空飛行を叩き出したのだ。まさかテスト中に、先生のことを考えてました（追い払う努力はしましたがダメでした）、とか口が裂けても言えない。絶対、言えない。

代わりに、私は文系なんですよと訴えても、今井先生は聞く耳を持たなかった。

「国語が出来るやつは、大抵の数学や物理だって出来んだよ。要は理解力と慣れの問題だ」

「そんなこと言われましても……」

「落ち着いてやれば、お前はもっと取れたと思うぞ」



意外なことばに、私は目を丸くした。

「先生」

「ん？」

「それ、本気で言ってます？」

私がまじまじといった調子で先生の顔を覗き込むと、どこか拗ねたように「さてはお前、おれのことを信じてないな？」

と、つぶやいた。しかし私はいたって冷静に返す。

「信じろって方が無理ですよ」

今まで散々、私をからかってきたくせに。そう視線にことばを込めてにらみつける。

「……授業で配ったプリントとワークの問題を丁寧にやれ。そうすれば、次は点数上がる」

少しは今までの己の所業を反省したのか、先生がアドバイスらしいことを口にした。

と、そこに、ぱたぱたぱた……。渡り廊下を走る音。どんどんこちらに近付いてくる。

あ、果歩だな、と思った。

「美優、ごめん。お待たせ！」

予想は当たって、渡り廊下の先から果歩が現れた。私は「ううん」と返事をする。

実際、果歩が戻ってくるまでそんなに時間はかかってない。いや、感じなかったといった方が適切かもしれないが。

「あれ、今井先生。こんなところで何してんですか？」

果歩が私と先生を見比べて、意外そうな顔をした。

「吉田をからかって遊んでた」

「ああ。面白いですよ、この子からかうと」

「果歩！」

それが親友のことばか。

「冗談だって、美優。早くこれ、運んじゃお」

「冗談には聞こえなかったですけどね。……じゃ、せーのっ」

果歩と掛け声を合わせて、二人でダンボール箱を持ち上げた。一人で運んでいた時より、随分負担が少ない。やっぱり、一人と二人とじゃ結構違う。二人の方が、よっぽど楽だ。

「それじゃあ、先生。また明日ですね」

果歩がそつなく、今井先生に別れを告げる。さっきまで上手く喋れていた私は、何故かそれが言えなかった。

「おう、気をつけてな」

「はい」

背を向けかけていた先生が、ぴたりと止まって私に声を投げる。

「あ、そうだ。吉田」

「……？」

ことばの続きを待つ私に、先生がニヤリと笑った。

「誠実、だったよ」

一瞬、何のことだか分からなかったが、すぐにさっきの会話を思い出した。

『先生の誕生花は、何ですか？』

『さて、何だろう』

誕生花の、花言葉だ。

「じゃな。転ぶなよ」

今度こそ、今井先生は背を向けて歩き出した。白衣が夕日に照らされて、赤く燃えているみたいに見える。

「——先生、さようなら！」

私の別れの挨拶に、先生は背を向けたまま、ただ片手をひらひらと振った。

気障ったらしい。

でも——それがサマになっている、と思うのは、やっぱり何とかの欲目って言うのかな。

+ + +

結局、親友の猛烈な追及から逃れきれず、私は電話越しでべらべらと眼鏡の一件から始まり、今にいたるまで一時間半もかけて話してしまった。喋りすぎて、のどがカラカラだ。

時計を見れば、もう夜も遅い。そろそろ寝たいのが本音だが、電話相手がそうさせてくれない。

『で？』

電話越しから聞こえるその一言が、「続きを語れ」と催促している。

「……って、言われても、それだけだよ」

『何で～！？ 告白すればいいじゃない、告白！』

予想以上の大声に、キーンと耳鳴りが起きた。目が覚める。

「迷惑になるだけだから、しない」

『だって、今井先生、独身じゃない。それにこっちは花の女子高生だよ。勝ち目はあるって』

「いや、勝ち目とかの問題じゃなくて……」

確かに花の女子高生と言えれば聞こえはいいが、三十路も過ぎた男性にとっては、やはり子どもなんじゃなかろうか。

うーん、と考えている間にも、どんどん話は進んでいく。

『それにさ、告白しないで、どうやってその気持ちに区切りつけんのよ。告白ってのは、自分の想いに区切りをつけるためにもするんだよ。たとえ叶わないってのが目に見えてても。一種の浄化行為とでも言うか……』

それは、確かに頷ける。

しかし、そこに相手の意向を考えずにただ自分の思いだけを尊重してしまっているのか、と疑問に思ってしまう自分がいるのだ。

「果歩。私、流れに任せてみようかなって思うんだ」

『流れ？』

「うん。流れ」

もしかしたら、告白するかもしれない。もしかしたら、何も言わずに卒業するかもしれない。ただ気持ちの赴くままに、任せてみようかと決めている。

『……それって、もしかしたらその場のノリと勢いで告白するかもしれないってこと？』

「うん。そういうことも、あるかもね」

言われてみれば、確かにノリや勢いと言えなくもない。

携帯電話の向こうから、果歩が長い長い溜息をつくのが分かった。

『ま、アンタらしいわ』

「でしよう？」

『でも、応援はしてるからね』

「うん、ありがと」

私は親友のメールにそっと微笑むと、「おやすみ。また明日学校で」と通話を切った。

携帯電話の向こうから、『おやすみ、ばか』と心外な台詞が聞こえた気もするが、文句は明日までとっておくとしよう。

+ + +

それからまた何日かして、私はまた物理の小テストで満点を取った。

解答用紙の得点欄の脇に、右上がりの癖字で「よくできました」の赤い七文字。思わず頬が緩む。

「幸せそうだね、美優ちゃん」

後ろの席の果歩に椅子を軽く蹴られて、私は彼女に解答用紙を見せびらかす。

「えへへー。いいだろ」

「ちなみに、私も」

私の目の前に、果歩がピラっと解答用紙を差し出した。見れば確かに、私と同じ100点満点。

「あ、ずるい！」

「何がよ」

言われのない抗議に、果歩が「アンタこそ、ずるいじゃない」と反撃してくる。

「へ？ 何が？」

「ここ」

果歩が指差したのは、自分の解答用紙の得点欄の、脇。

「あれ……？」

果歩のものにはなくて、私のものにはある、「よくできました」。

「ひいきだわ」

たった七文字だけれど、確かに違いが付けられている。

(……何か、特別だと思っても、いいのかな？)

いつも通りに小テストを次々に返す先生の横顔からは、結局何も読み取れなかった。

けれど、その授業の終わりに、

「今日提出の課題プリント、回収するぞ」

先生のことばに我が耳を疑った。思わず後ろを振り返る。

「え、そんなのあったっけ、果歩?!」

「あったわよ、ばっちり。何、忘れたの？」

「……存在すら忘れてた」

小テストにばかり気を取られていて、肝心の課題プリントを忘れていた。

次々と回収されていくプリントの束をみて、「あ〜……」と気が遠くなる。

「忘れたやつには、特別プリント用意してあるからな。えーっと、未提出者は、……小池友里、後藤勇介、鈴木直人、寺田一誠、吉田美優……以上、五名。各自放課後までプリント受け取りに来いよ。それじゃ、今日はここまで」

キーン コーン カーン コーン

授業終了の鐘が、むなしく響いた。

「さて、理由を聞こうか」

その日の放課後。

私は単身、職員室へと乗り込んだ。果歩には「良かったわね。頑張りなさいよ」と送り出されたが、私としては良かったも何も、舞い上がるような気分では到底ない。むしろこの空間は針のむしろだ。

「えーっと、正直に言うのですね、その、小テストの勉強にばかりかまけていたら見事に課題プリントの存在をですね、ええと」

目の前では、地獄の死刑執行人こと今井先生が、赤ペンを持ちながら私と向かい合って座っている。

「——忘れていたと」

「平たく言うとその通りです。すみませんでしたっ」

息継ぎもせず勢いよく頭を下げた。先手必勝。平謝り。

「まあ、来週までにそのプリントと、今渡した追加分をやって来てくれれば……」

「やってきます！」

間髪入れずに宣言すると、今井先生は「ぶっ」と嘔き出した。

「……………先生？」

怪訝な表情で頭を上げれば、そこには肩を震わせて笑いに耐える先生の姿があった。私、何か面白いこと言いましたか？

「いや、ごめん。何かあんまりにも……………」

笑いながらフォローされても。

「あんまりにも、何ですか？」

笑いすぎて涙腺でも緩んだのか、先生は眼鏡を外すと自分の袖口で目許を押さえた。

先生が眼鏡を外すところを見るのは、初めてだ。雰囲気少しばかり和らいで、幾分若く見える。

「何かさ、あんまりにも一生懸命だから。……………そんなにおれ、怖い？」

「いいえ滅相もないです！」

慌ててぶんぶんと首を横に振る。

「女子高生が『滅相』って……………！」

どうやら今日の先生、笑いの沸点が少々低めらしい。

……………今の先生になら、聞けるかもしれない。

「先生、こないだの『誠実』ですけど」

「うん？」

「あとで確認してみたら、四つ五つありましたよ」

「……………本当？」

こくん、と頷く。あの後、一月から順に確認していったのだが、『誠実』という花言葉を冠せられている花は、ばらばらの月に存在していた。それも、全て違う花で。

「ふうん」

先生は若白髪のある頭をガリガリ搔くと、

「………………………………………二月のやつだよ」

ぼつり、呟いた。

私はまさか教えてもらえるとは思っていなかったので、落ち込んでいた気分が少々浮上する。我ながら現金なものだ。

「じゃあ、あとでこっそり確認しておきます」

「しとかなくていいよ、そんなもん。それより、プリント、来週は忘れんなよ」

「はあい」

そろそろ、退室した方がいいかもしれない。

「先生、最後に一つだけ」

「何？ 質問？」

「うん。甘いもの、好きですか？」

「……………吉田」

あんまりにも深刻そうな声を出すから、何かタブーにでも触れてしまったのかとちょっと身構える。

「おれね」

私はそのとき、滅多に見られない今井先生の真剣な顔に見つめられて、不覚にも胸をときめかせた。……いや、そんな場合じゃないんだってば！

「おれね、実はこの学校で一番、甘いものが好きな男性教師だと思うんだ」

私は思わず「ばか！」と言いかけて、思いとどまることに何とか成功した。いくらなんでも、教師相手にそれはない。

しかし、すごく真剣な顔をするから、怒られるのかと思って、そっちでもドキドキしちゃったじゃないか！

「……………それは良かったです」

「何で？」

先生の問いには答えず、私は溜息とともに緊張を解くと、制服のポケットの中身をがさごそとあさる。昼休みに食べそこねたアレが入っているはずだ。

「甘いものが好きなら、これを食べられるでしょう？」

そう言って、先生の掌にコロんと、ポケットから取り出したものをそっと落とす。

「…………マシュマロ？」

「しかも、チョコ入りです。美味しいですよ」

オススメです、と念を押すと、先生はそのファンシーな包み紙に苦笑しながらも、

「ありがたく、もらっところ」

と、白衣のポケットの中へと滑らせた。

「それじゃ、私はこれで」

「おう」

先生に背を向けかけて、「あ」と振り返る。大事なことを忘れていた。

「ね、先生。もう一つだけ、いいですか？」

「今度は何だ？」

やれやれといった様子で赤ペンを机に置くも、先生は嫌な顔をしない。私はそのとき、それが先生のポーズなんだってことに気がついた。やっぱり今井先生は、優しい。

「私の100点満点、果歩のものと七文字だけ違うんですけど、それってどういう意味ですか？」

先生は少し考えるように天井を見て、そしていつかのようにニヤリと笑ってこう言った。

「…………期待分、かな」

それ以上は、教えてもらえなかった。

そうやって、秋を過ごして冬を越え、春を迎えて夏がきた。

私と今井先生は、その間ずっとそんな感じの距離を保ちながら、再び桜が咲き始めようとする頃を迎えた。

とうとう、卒業式だ。

私は地元の私立大学へ。果歩は東京の国立大学への進学を決めた。二人とも納得した結果で、後悔はない。

「先生、見つけた！」

「よう。卒業生」

式が終わり、職員室には今井先生しか居らず、しんとしている。

正門付近では、最後の思い出作りにと、卒業生たちが先生たちと記念写真を撮っている。それを囲むように、後輩たちが花束や色紙を握り締めながら、それぞれ目当ての先輩を探していた。

「先生は、下で皆と写真撮らないの？」

「お前こそ、記念写真はいいのか？」

「……だって」

「何？」

窓際で下を眺める先生の隣に、そっと立つ。立つ側は、もちろん先生の左側。

「分かってるくせに、先生ってずるいよね」

「ずるくて結構。大人だからな。お前もちょっとしたしたら、こんな風になるよ」

「えー。先生みたいにひねくれたくはないなあ」

「……お前ね」

茶化すように私が言えば、先生が横目でこちらをじろりと睨む。それが何だか拗ねたような視線で、私は笑ってしまった。

「……ねえ、先生」

今なら、答えてもらえるだろうか。

「『期待分』って、どういうことですか？」

一年以上かけても解けなかった謎の答えを見上げて訊けば、そこには先生お得意の、ニヤリとした笑み。

「お前って、褒められると伸びるんだよな。……知ってた？」

私はぼかんと口を開けたまま、しばらく口を利けなかった。

「……知りませんでした」

しばらく経ってぼつりとそう返せば、しれっとした顔で先生が「だと思った」と言う。

「乙女心を弄ぶなんて、ひどい教師だよ、先生」

唇を尖らせるように文句を言うと、

「でもそのおかげで、物理の成績がグンと伸びたじゃないか」

逆に「感謝しろ」と言われてしまった。

(……やっぱり、先生には敵わない)

くすり、と笑みをこぼす私に、先生は「なに笑ってんだ？」とちょっと不

思議そうな顔をする。

そうそう、一つ訂正しておかなければならない。

先ほどは私と先生を「何も変わらない関係」みたいに表現したが、私はいつの間にか、先生とタメ口で話すようになっていた。それは、一定の距離が保たれていた証拠ではない。私が「近付きたい」と思ったからこそ、縮まってしまった距離を表している。

「先生」

こう呼びかけるのは、もしかしたらこれで最後になるかもしれない。大学に入ってしまったら、もう、彼をこう呼ぶ機会がなくなってしまうのではないだろうか。

そう考えたら、私は居ても立ってもいられなくなってしまい、ほとんど衝動的にそのことばを口にした。まさに果歩の言うところのノリと勢いである。

「私、先生のこと、ずっと好きでした」

心が受け止めるままに、ありのままに、気持ちを告げる。

先生はちょっと驚いたように目を見張ったが、瞬きも忘れたように凝視している私の様子を見て、ふっと笑った。初めて見る、優しい笑み。

「——うん、ありがとう」

先生からの返事は、たったそれだけだった。

きっと、先生もまた、ありのままの気持ちを返してくれたのだと思う。

私は、それ以上、望まなかった。

その代わり、と言ってはなんだが、私はここへ来た当初の目的を果たすことにした。

「先生、写真、撮ろ？」

「……二人で？」

「うん、二人で」

先生はそんな私に対して、しょうがないな、って感じの顔で静かに笑った。

私の机の上にある一つのフォトフレームには、三枚の写真が納まっている。親友と、家族と、それから恩師。

高校生だった私を支え続けてくれた人たちの、大切な写真が。

(了)